

まちづくり ひろしま

第38号 (平成30年11月15日)

読者数：634名 (募集中)

メール：hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二

配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

□ 巻頭言

自然災害に付き合う

元広島大学大学院社会科学部教授 松田 智仁



この度の7月豪雨災害でお亡くなりになられた方々のご冥福を心からお祈りいたしますとともに、ご遺族の皆さまに心からお悔やみ申し上げます。また、被災された皆さまに心からお見舞い申し上げます。

まずこの度の7月豪雨災害は、6月28日から7月8日にかけて、西日本を中心に北海道や中部地方など全国的に広い範囲で記録された台風7号および梅雨前線等の影響による集中豪雨による災害でした。この豪雨により、各地で河川の氾濫や浸水害、土砂災害が発生し、死者数が200人を超える甚大な災害となりました。特に、避難の実行が問われる大災害となりました。



知人宅前河川と知人宅
呉市天王地区7月7日

広島県における直近の豪雨災害では、2014年8月豪雨による広島市での土砂災害があります。8月20日未明の土砂崩れにより山裾の住宅地に甚大な被害を出した「都市型土砂災害」です。この災害では、都市計画・防災計画の様々な問題点が浮かび上がりました。

「土砂災害防止法制度」をご存じかと思います。土砂災害から人命や財産を守るため、土砂災害防止工事等のハード対策とは別に、危険性のある区域を明らかにし、その区域の中で警戒避難体制の整備や危険箇所への新規住宅等の立地抑制等のソフト対策が講じられます。内容は、①急傾斜地の崩壊等が発生した場合に、住民等の生命又は身体に危害が生じる恐れがあると認められる区域であり、危険の周知、警戒避難体制の整備が行われる「土砂災害警戒区域」(イエローゾーン)と、②急傾斜地の崩壊等が発生した場合に、建築物に損壊が生じ住民等の生命又は身体に著しい危害が生ずる恐れがあると認められる区域で、特定の開発行為に対する許可制、建築物の構造規制等が行われる「土砂災害特別警戒区域」(レッドゾーン)の指定で構成されています。実はこの制度、1999年の6.29広島豪雨災害(土砂災害発生件数325件、死者24名)を踏まえて創設された制度です。2001年に施行され、2003年には広島県において、全国初の土砂災害警戒区域等(13区域)が指定されました。

2014年の広島豪雨災害も、今年の7月豪雨災害も、この制度の区域指定の進行中に発生しました。県内指定対象区域推計49,500か所に対して、2018年3月末現在の調査完了区域28,965か所、2017年7月27日現在の指定済み区域20,138か所において、この度の土砂災害による死者は、指定区域内では41人、未指定危険箇所内24人、区域外10人、不明12人の合計87人となっています。制度設計どおりに対応できていれば、41人は避難により助かったはずですが、また、区域外でも10人が亡くなられたことは、区域の範囲に課題を残す可能性があり、8.20災害以降のさらなる指定基準の見直し等の改善が求められます。(数値データ出典はいずれも広島県のホームページ2018.9.30)

小生は、2014年広島豪雨災害の後の9月から2015年11月の間、日本都市計画学会「中国四国支部広島豪雨災害・防災まちづくり検証特別委員会」土地利用検証部会長を務め、災害一年

後の2015年8月20日「2014年8月20日の広島豪雨災害を踏まえた防災まちづくり検証結果報告書」を取りまとめました。<http://cpij-chushikoku.jp/resource/documents/201508kensyou-houkoku.pdf>
この各種提言を含む報告書は国土交通省、広島県にも提出させていただきました。

この度の7月豪雨災害を経験して特に備えが必要と思うところを三点申し上げます。

一点目は「土砂災害防止法制度」のさらなる見直しです。制度は成長できます。この法制度は2014年の広島豪雨災害を踏まえて改正が行われました。①危険区域の調査段階からの公表、および指定の促進、②気象庁、県が発表する警戒情報の市町村長、住民への周知の義務付け、などです。今回申し上げたいのは、巨石の流出や深層崩壊などを受けて、①前回提言した、住居移転ゾーンの創設を含む3段階区域区分の導入、②区域指定にあたり風化花崗岩などの土質に関する要素を増大させる(区域を広くする)ことです。

二点目は、建築物の構造規制制度の導入です。レッドゾーンでは建築物の構造規制が定められていますが、前回提言の、火災に対する「防火地域」同様に、土砂災害や津波、洪水に対する「防水地域」の創設です。建築基準法第一条には、「この法律は、建築物の敷地、構造、設備及び用途に関する最低の基準を定めて、国民の生命、健康及び財産の保護を図り、もって公共の福祉の増進に資することを目的とする。」とあります。生命、財産を守る建築の実現です。具体的には、①「防水地域」 住宅は三階建て以上、居室は二階以上、二階以下はRC造、建ぺい率+10%、容積率+50%(津波や洪水対応も想定)、②「準防水地域」 住宅は二階建て以上、居室は二階以上、一階をRC造、建ぺい率+10%、とするなどです。

三点目は、全国の土砂災害の危険箇所へのワイヤネット式砂防施設の緊急整備です。多くの犠牲者が出てから基盤整備として砂防堰堤が整備されるのを見受けます。本来、砂防施設整備の目的は災害の未然防止であるはずですが。とはいえ、土石流分野だけでも全国に215,000か所を超える危険箇所があると言われており、これらすべてに砂防堰堤や治山堰堤を整備することは大変むづかしいと言わざるを得ません。せめて、人家の上流の溪流には、垂直型や溪流被覆型のワイヤネット式の砂防施設を整備し、コンパクトシティへの移行(危険区域から転出)に合わせて、計画的に本格的な砂防堰堤等の整備に切り替えて行くべきと考えます。

おわりに、制度や施設が整備されても、自然災害の規模は次々と想定を超えており、住民避難の実現は言うまでもありません。また、今回の災害では新たに、河川氾濫問題、ダム放流問題、ため池管理問題などが浮上りました。人間は自然に驕(おご)ることなく備えていく必要があります。一方で異常気象が日常化しつつある今日、地球温暖化を引き起こしているのは人類であることを忘れず、日々の生活の中で二酸化炭素の発生に関心を寄せ、削減に努めていく必要があると思います。最後に一言「避難勧告、すぐ避難」。

ひろしまのまちづくりの動き

① 紙屋町・八丁堀地区が都市再生緊急整備地域に指定！

10月24日、広島市中区の紙屋町・八丁堀地区が国の都市再生緊急整備地域に指定。土地利用の規制緩和や税制支援などが受けられ、民間の活力を中心とした都市再生を促すことができる。

広島市と商工会議所は商工会議所ビルの移転について市営基町駐車を候補地として再開発事業を検討。敷地の南側には広島朝日ビル跡の空地があり、一体的な整備も可能。市はこの事業をモデルケースとして都市再生を加速させたい意向。

同地区は中四国地方最大の業務・商業集積地であるが、空洞化による地盤沈下が叫ばれ、老朽建物も顕在化している。この地区を再生することにより、昨年3月に県と市でまとめた二つのコア(同地区と広島駅周辺)を持つ楕円形の都市活性化プランの実現にも弾みがつく。

市は民間開発を促進するため、事業者や地権者向けの相談窓口を新設し、制度の周知を図り、事業の具体化をサポートすることにしている。

商業施設だけでなく官公庁施設や中央公園を含むこの地区の将来の姿をどう描くか、構想力と実行力が問われている。



中国新聞(2018.9.30)

○ 広島復興の軌跡・人物編（第13回）～藤本千万太広島市長室職員（前編） ～堅実な業務推進能力と重要資料所蔵の努力及びその実行力～

はじめに

広島復興のプランナーや復興事業担当者といった直接的関係者ではないが、復興計画に関連した重要な業務に関わり、結果的に時代の流れの中で、極めて大きな役割を果たした人として、広島の職員で藤本千万太（ちまた）氏を挙げることができる。筆者の研究分野からの評価を前面に掲げて恐縮であるが、まず藤本氏の顕著な偉業として挙げられるのは、恐らく丹下健三書簡の長期保存であり、それをそっくりそのまま広島市公文書館に寄贈されたことではないか。この詳細は後述するが、藤本氏は併せて、多くの資料を保存していて平成2年6月に寄贈した資料が、「広島市公文書館紀要第二十三号」（平成11年12月発行）の巻末に「藤本千万太資料目録」（広島市公文書館受贈資料目録Iより）として掲載されており、その原本は平成6年発行の「受贈資料目録I」にも載せられているが、これだけの資料をよく残しておいてくださったものだというのが、率直な感想である。これら資料の多くは広島平和記念都市建設構想に関連したもので、そのタイトルだけを見ても、当時放置され、散逸してしまってもおかしくない多くの資料が収蔵されて保管され、後に寄贈されることにより、現在に継承されたことがわかる。

今回、藤本氏に関わりがある資料を取り上げ、藤本氏のアクティビティを描き、可能な限りその意味を考察してみよう。（以下敬称略）



1. 丹下書簡の寄贈に関連して

平成21年1月9日付中国新聞で「平和公園設計 23通の情熱／故丹下健三氏の直筆書簡」の見出しで報じられたのが、全23通に及ぶ丹下健三（その研究室スタッフを含む）と広島市長室との凡そ2年にわたる往復書簡の内の丹下側からの発送された書簡であった。実はこの書簡は先の平成6年や平成11年のリストでは「書簡綴」として内容が掲載されていなかったが、それは丹下の生前での公開禁止を条件に寄贈されていたというのである。そして丹下は平成17年3月に他界され、書簡の公開が可能となり、平成21年1月の報道となった。

歴史的には、昭和24年5月に広島市平和記念公園のコンペティション募集が開始され、同年8月に結果が発表された。そして丹下健三グループが一等入選を果たしたことはよく知られているが、その後丹下（その研究室関係者を含めて）が必要あって、広島市の市長室のスタッフと連絡を取り始め、次第に広島復興の進め方やその戦略に迫る内容を書簡に展開していたことは、必ずしも公知のことでは無かった。そこに平和記念公園の形成史といった内容や、建設における市と国とのやりとり、公園のディテールの意図や意味が散りばめられており、情報の宝庫ともいえる。この内容は、様々な形で紹介されているので詳細は別途参照していただきたいが、とりわけ注目されるのが丹下の平和公園実施設計への情熱、ディテールへのこだわり、最終段階で慰霊碑の前面で段差をつけたことなど、明らかとなるのである。

2. 藤本の登場と役割

ここで藤本はどのように登場するのであろうか。それは丹下が市長室へ書簡を送ろうと決心し、昭和24年11月27日付の書簡1で、丹下の直筆で送られてきたことで明らかとなる（その時、宛名が森本様となっていたことも今となっては歴史的事実）。そして、次便からは藤本千万太と修正され、さらに浜井信三市長宛や銀山匡助宛も混じってくるが、藤本宛が圧倒的な比重を占めていた。すなわち、藤本は丹下からの市長室における代表的連絡役として位置付けられ、それをよく果たしたのである。



丹下はコンペで入選した平和記念公園の実現をはかるべく執念を燃やし、市当局を鼓舞し、当時の建設省や関係機関とうまく折衝するように作戦まで指示していた。そういった努力が払われていなかったら、果たして現在のような平和記念公園が実現していたかどうか、そういったやり取りが、これらの書簡を通して手に取るように見えてくるのである。

一方、限られた予算の中で、コンペ終了後であっても模型製作を試みたり、丹下が世界の建築家として認知されていく過程、すなわち国際的な建築家組織（CIAMと称された）参加へ懸命な姿勢であったりしたことも、この書簡の中からはうかがわれるのである。

ここでは書き切れないが、この書簡の存在がなければ明確になっていなかった多くのことを指摘できるのであるが、多くの丹下の意図が実現していったということは、すなわちそれを支えた藤本たちのフォローがあったということに他ならない。

3. 小結

藤本の活動や役割はさらに大きく展開すべき内容があるので、後編として続けさせていただきたい。ここでは、藤本が丹下書簡を保存していて、ある段階で公文書館に寄託したことの意味について触れておきたい。

戦後の広島での丹下書簡を保存し、後に寄託した藤本の行為は、越権行為であるとか、本来必要ないものであるとかの指摘もあろう。

現在政治家やお役人が公文書をどのように保存・継承するか問われている。しかしそこでは如何に後に責任を問われないようにしておくか、政策決定過程での余計な情報は残さないようにしようとか、後ろ向きの姿勢が見え見えである。

政策決定過程をどう説明するのか、その時代の関係者が歴史に如何に関わったのか、今や次第に見えなくなっているのではないだろうか、公文書の在り方が問われているのである。

参考文献1：拙著：広島平和記念公園コンペ後に広島市担当者に送付された丹下健三書に関する研究（日本建築学会中国支部研究報告集第34号、平成23年3月、）

参考文献2：中川利國著：「丹下健三書簡綴」（藤本千万太資料）について—広島市公文書館所蔵資料との関係を中心として—（広島市公文書館紀要第27号、平成26年6月発行、pp.54-58）

藤本千万太氏のプロフィール：大正5年生まれ、昭和12年旧制広島高校卒、昭和21年1月広島市職員、昭和24年市長室に配属され、平和都市建設構想策定や平和都市法制定に関わる。昭和52年市民局長を最後に退職、市原爆被害者協議会や市観光協会事務局長、エリザベト音大事務局長等歴任後、平成23年9月死去。（広島市公文書館紀要第27号 p.58 参照）

（編集委員 石丸紀興）

○ 本「広島市被爆70年史」—あの日まで そして、あの日から 1945年8月6日—紹介

広島市の被爆70周年記念事業の一環として「広島市被爆70年史」が発行されている。原爆が投下された1945年8月6日を中心軸として、それ以前の近代史とそれ以後の現代史を併せた市史となっている。内容が多岐にわたり、800頁近い大著なので、その概要と興味深いところについて紹介。

☆ 全編の概要

1 戦前編

城下町広島の誕生から始まり、江戸時代にデルタを埋め立てた新開地により都市域を拡大し、明治に入って広島市が誕生。日清・日露戦争を通じて軍都の色合いを濃くし、鉄道・電車やバス等の交通網など近代都市としての基盤が整備されていく。

2 戦中編

1931年の満州事変後、戦時体制が強化され、1941年12月に米英などの連合国との全面戦争に突入。形勢が不利になる中、学徒動員や国民義勇隊による建物疎開や学童疎開など、本土決戦に備えたが、1945年8月6日の米軍の原爆投下により広島は壊滅する。

3 戦後編

廃墟から立ち上がり、復興を遂げていく過程をまちづくりと社会・経済・文化の動向等か



らアプローチし、被爆の実相を後世に伝えようとしている。最後に、高度経済成長以降の都市の拡大に伴う課題等を整理し、被爆 100 年に向けた方向性を提言している。

☆ まちづくり関連で印象に残った個所から一部抜粋

1 近代都市へ

大正末から昭和初期に提案された「大広島構想」は単に人口増や市域拡大を狙ったものではなく、公園新設、河川の整備、運河の新設、市街電車網の形成、道路の新設計画、新開地の埋め立てと住居・工業地域指定、宇品港の開港等、意欲的な提案であった。(P105)

2 復興都市へ

1948年に市議会全員協議会で採択された「広島原爆災害総合復興対策に関する請願書」に記された基本的理念は、「広島市の戦災があらゆる民族のすべての人々に対する警告として寄与した歴史的意義とその後の広島市に対する世界人類の興望(よぼう)とにかんがみ、国際的平和の記念都市を建設してこれに応えなければならない責務」とある。(P297)

3 21世紀の平和都市像

エルサレムには世界のキリスト教徒たちがキリスト磔刑(たっけい)の受難の遺構を訪れるべく、巡礼の旅を行う。悲劇を追憶できる場所は平和を願う人々を結びつける絆ともなる。広島には21世紀の地球共同体の構成員を結びつけられる遺構があり、いわば現代的な宗教都市として世界的なツーリズムの目的地となることができる。(P491)

コメント

広島のまちが形成されていく背景等がよくわかり、これからの広島を考える上で必見の書、間違いなしである。
編集委員 瀧口信二

□ ほっとコーナー

心のご馳走

いちえプロジェクト代表 竹元恵美子

こんにちは。いちえプロジェクトの竹元恵美子です。

広島を活動の中心に、語り、朗読、歌、演劇をさせていただいています。

広島カープと共に戦後の広島を元気づけ、日本の食文化を変えたアンデルセン。今回はそのアンデルセンが創設した「アンデルセンのメルヘン大賞」について、お話をさせていただきます。

アンデルセンは1948年に広島で創業。お客様の食生活の向上に役立ちたいと願い、おいしく、品質のよいパンを届け続け、私達の食生活はととても豊かになりました。そしてアンデルセンは創業35周年を記念して、公募童話大賞「メルヘン大賞」を創設し「心のご馳走」を私達に届けてくれることになりました。「アンデルセンのメルヘン大賞」は一般の方からメルヘンを募集し、大賞作品にプロの画家がそのメルヘンの絵を描くという何とも贅沢な公募童話大賞です。メルヘンは豊かな空想から生まれ、時間も場所も超えて、読む人を楽しませてくれます。そんな「心のご馳走」を35年間も私達に届け続けてくれているのです。

その第35回の「アンデルセンのメルヘン大賞」受賞作品の原画展が、ひろしま美術館地下講堂で、12月16日(日)まで開催されています。入場は無料です。ワークショップも行われています。そして、11月18日(日)に僭越ながら私、竹元恵美子が第35回大賞受賞作品の原画を前に大賞受賞の二作品を朗読させていただきます。



また、広島アンデルセンで、過去のメルヘン大賞受賞作品とハンス・クリスチャン・アンデルセンの名作「みにくいアヒルの子」「マッチ売りの少女」を朗読させていただきます。

メルヘンは子供の為だけのものではありません。大人になったからこそ、メルヘンというオブラードに包み、せつなさや、愛しさ、そして生きる喜び、感謝の気持ちをたくさんの心のひだに与えてくれます。

お時間がありましたら、是非、メルヘンの世界にお立ち寄りくださいませ。

<https://www.andersen-group.jp/meruhen/メルヘン大賞原画展 A4 チラシ.pdf>

○ 「時代を語り建築を語る会 (第22回)」 報告

語り人：川島宏治氏 (ちゅピCOMひろしま プラス1 担当)

～逆インタビュー：川島宏治氏に聞く広島における人材～

広島のカプセルテレビで200人以上の人物を紹介している実績を踏まえ、各界の第1線で活躍する人物像などについて語り合う。

主催：時代を語り建築を語る会実行委員会 (代表：石丸紀興)

日時：2018年9月26日 (水) 18:45～20:15

場所：合人社ウェンディひと・まちプラザ



略歴：1953年広島市生まれ、1977年明治大学政経学部卒、中国放送へ入社。RCCテレビでメインキャスター、RCCラジオでセンターデスク&プロデューサーを務め、現在はちゅピCOMひろしま副社長。

☆ ちゅピCOMひろしま プラス1について

以前は地域限定のカプセルテレビだったが、今は広島市周辺を含む都市型ケーブルになる。地域情報のみから脱却してブランディングを高めるため、広島で活躍する経営者等を紹介する番組をスタート。

☆ インタビューした人の分類

・ **オーナー経営者** 経営哲学や戦略は各人各様だが、共通する点は「儲ける仕組みを作った人」。カリスマ経営者から代替わりすると垂直経営から水平経営になり、合議制を重んじる傾向が強い。

・ **一般の経営者** 組織の中で実力を評価されて抜擢された人。苦手な分野を克服して自分を磨いてきた人が多い。

・ **起業家** IT分野やサービス業に多い。地方のIT起業家は地元会社等のアプリケーションなどを制作する企業が多い。写真を3D化した一流企業も広島にある。

・ **芸術家、大学教授、アスリートなど** 個人が中心となって活躍している人。天才肌や努力家など人それぞれだが、独特の面白さ、個性がある。

☆ 新しい動向

・ マルニ木工の椅子がアップルのオフィスで採用。まずデザイナー (日本人) が評価され、そのデザイナーと組んでいるマルニ木工ならということで信用される。これからは機能や価格だけでなく、デザイナーの哲学やデザインの物語性に価値が生まれる。

・ 大量消費の時代では市場のニーズを把握して、生産すれば利益を上げられたが、今のようになりニーズが多様化するとそうはいかない。これからは自らがマーケットを作っていく時代に突入。ロボットなどがその典型で、鉄腕アトムを作ることがAI (人工知能) の最終目標。

・ フォルクスワーゲン社長は、車のメーカーからモータビリティ・プロバイダーを目指すと言っている。車体の中にいろいろな機能を持たせる時代がくる。誰とどう組むかが大事。

☆ 広島のみちづくり

・ 景気の動向は、製造業は為替相場に影響されるが、サービス業はインバウンドがけん引している。インバウンドを増やすにはまちの情報発信力と地域住民のおもてなしの心が重要。

・ 観光資源を活用する地域づくり法人も誕生し始め、観光はまちづくり。個々に頑張ってる人はいるが、面的な広がりが無い。世の中はコインの裏と表でできているように、人にも長所と短所がある。人の組み合わせがかみ合えば、力も倍増するが、ミスマッチも多いのでは？

・ 自分の考えと違う人とも一緒にやっつけられる度量の大きい人材が求められている。広島には提言する人もそうだが、特に推進する人のリーダーが必要とされている。

・ サッカー場候補地等でどっちがいい悪いと選択しているが、将来の姿を見据えたグランドデザインがない。「水と緑のまち」のようなありふれたキャッチフレーズではなく、広島をどういうまちにしていこうとするのか、分かりやすく発信する錦の御旗が必要ではないか。

☆ カーブ談義

・ チームとして負け癖がつくと、選手は個人成績に走りがちだが、カーブにはチーム優先の気風がある。楽しんで勝ちたいという球団もある中、カーブは練習量も負けていない。

・ 旧市民球場はおじさんの球場だったが、マツダスタジアムになって若者や女性が増え、マーケティングのお手本。カーブ女子の消費には驚き。カーブのことをよく知らないのにユニホームを買って、新幹線に乗って来て、球場の雰囲気を楽しんで帰っていく。

(編集委員 瀧口信二)

○ 広島市中央公園を考える⑦ アイデアコンペ (平成23年) からの提案その1

これまで過去に中央公園のあり方について提案された内容を整理し、分析している。今回は、広島アイデアコンペ実行委員会が平成23年に実施した被爆100年広島市中央公園アイデアコンペの中から堀 弘明氏の提案「Peace Ring Park」(優秀賞)を紹介する。

Peace Ring Park ピースリングパーク

このアイデアコンペは、広島平和記念都市建設法の精神を具現化するために、広島市中央公園をいかなるコンセプトを持って整備したらよいか、現実的な制約条件に捉われることなく、自由な発想で提案してもらった。この提案も中央公園とその周辺まで全面的に再開発しようとする大改造計画構想であり、そのスケールの大きさに目を見張る。

< I > コンセプト 心環 しんわ

人と人との出会いが相手を理解しようとする心を育み、やがて生まれる小さな心の環が大きな環になって平和を築き上げる礎となる。

復興から進化へと加速する広島の未来へ、被爆後100年を迎える中央公園はその象徴として整備。

心の環は公園のシンボルとして具現化され、平和記念公園からつながる平和の軸を受け入れる。



- **先導** 被爆を体験し、戦災から復興したリーダーとして世界の都市と連携した平和活動や中国四国地方の中核都市として行政・経済を牽引
- **集客** メッセコンベンション都市として大規模展示場や国際会議場など、スポーツ競技施設、芸術観賞施設、テーマパークなどの施設群を配置し、集い・学び・楽しめる広島を形成
都心部への交通網の再構築など、世界中から多くの人やモノ・情報が行き交う広島を形成
- **充足** 訪れる人に満足を、暮らす人には喜びと誇りを、そんな魅力にあふれ、人々を惹きつけてやまない広島を形成

< II > 施設概要

(1) 旧市民球場跡地と原爆ドーム周辺

中央公園一带に設置するペDESTリアンデッキを原爆ドーム近くまで延ばして両公園を一体化し、歩行者の回遊性を高める。平和の軸線上にオーパルパークとピースリングを配置。

- ・ **オーパルパーク** 訪れた人が自由にくつろげる楕円形の多目的芝生広場。
- ・ **ライブライブラリー** オーパルパークの東側に配置。中央図書館と映像文化ライブラリー機能をもつ最先端技術が投入された未来型図書館。将来、バスセンターを現在地から移設。
- ・ **ピースリング** 広島から発する平和の象徴。進化を続ける都市のモニュメントであり、中央公園のシンボル。リング内部には世界最大級の観覧車を収容。
- ・ 原爆ドーム周辺は爆心地エリアまで公園を拡張し、新モニュメントを建造。

(2) 中央公園内 (旧市民球場跡地ゾーンを除く)

各施設は人工地盤やペDESTリアンデッキで結ばれ、下部や地下には大型バスを中心とした大駐車場を整備。国際平和都市にふさわしい大規模国際会議等に対応したメッセ機能を備える施設、エンターテイメント性の高い施設等、それぞれの施設が有機的に補完し合う。



ピースリングのイメージ



全体の施設配置計画案

軸線上の北より広島国際展示場、ピースリングスタジアム、グリーンアリーナ（建替え）他

(3) 中央公園周辺

広島市の都心核である紙屋町交差点を中心に、そごうから基町クレド、県庁エリアを含めて商業施設の集積を図る。更に百貨店や専門店の周辺に魅力ある娯楽施設や文化施設を配することで、より広域からの集客を可能とする。

国際都市として中央テニスコートエリアに国連関連施設を、中国四国地方の拠点として国の合同庁舎エリアに州庁舎を誘致。

アクセス手段として複数の軌道系の導入・改良（アストラムラインの延伸など）を図り、メインとなる広島中央駅からはペデストリアンデッキやシャレオを経由し、都心のあらゆる場所に移動が可能。横川方面とは架橋により往来を改善。広島駅の西側再開発に合わせて、縮景園と駅を歩行者専用道で結び、更に伸ばして中央公園とリンクさせる。

<Ⅲ> 広島が直面する中枢都市としての課題

・広島は中枢都市として生き残れるか否かの瀬戸際に位置し、これから迎える危機を意識した魅力的な街づくりを進めなくてはならない。魅力ある街づくりには都心の整備は最重要課題であり、中央公園はその大きさと地理的な観点から都心再開発の核とすべき事業になる。

故に中央公園整備の方向性が広島の将来を左右するといっても過言ではなく、長期的視野に立って必ず成功させなくてはならない。

・平和を祈るイメージだけでなく、復興を果たし進化する姿を具現化した巨大なピースリングは、躍進する新たな広島の顔として都市のイメージアップにつながり、そのブランドが恒久平和実現のための拠点に加え、沢山の人々を引き寄せる華のある広島に繁栄をもたらす。

・10年先、20年先の計画だけではなく、50年以上先の広島のあるべき姿までもが描かれたグランドビジョンを市民に提示していくことが重要。そうしてできた計画案は、市民と夢の実現に向けての意思を共有し、世論を高めていくことや、ゆくゆくは地権者との交渉の材料にもなる。

(以上は堀 弘明氏の提案の概要)

<コメント>

・目指すべき方向性を示し、その具体的なイメージを提案している点は特筆すべきであり、まさにグランドデザインの提案である。最初にこの作品を見たとき、東京の大手設計事務所の提案ではないかと予想したが、広島の一市民の提案であり、感服した。

・この提案が実現できれば、すばらしい広島のまちのコアになるであろうと期待させるものがある。財政や土地取得など、クリアしなければならない障壁は非常に高いが、グランドデザインとして市民と共有できれば、不可能ではない。グランドデザインとはそういうもの。

・平和の軸線上に各施設が配置された計画案は、丹下健三氏が1950年に発表した「広島平和都市建設構想案」に匹敵するものであり、平和発信とメッセコンベンション機能を併せ持つ明確なビジョンが示されている。

・国の合同庁舎エリアへの州庁舎誘致計画も道州制が布かれれば現実性を帯びたものとなり、県庁エリアの再開発を検討する時期がやってくるであろう。

・基町高層アパートも50年先には役割を終えて公園に戻れば、この提案のようなスタジアムもありうる。丹下構想と類似。今のサッカー場建設を考えるうえで大いに参考となる。

・ちょっと気になるのは、人工的すぎるところか。自然な緑のオープンスペースが少なく、中央公園のイメージから離れて、全体がメッセコンベンション・エリアと化している。機能を詰め込みすぎと思う。

・アイデアとしては優れているが、実現性を考えると各プロジェクトの課題等を精査する必要がある。次に優先順位をつけて、段階的に整備できるように長期計画を策定し、その計画を継続的にフォローアップできる体制を維持しなくてはならない。市長が変わるごとに覆られていたのでは前進はあり得ない。

・そのためにも中央公園とその周辺を広島のまちのコア、更には世界の平和のコアと位置づけ、世界に向けて発信できるグランドデザインを創り上げていかなければならない。

(編集委員 瀧口信二)

街角ウォッチング

シャレオはおしゃれ？！

技術士 片平 靖

「紙屋町シャレオ」は2001年4月に開業した広島で唯一の地下街である。紙屋町交差点の地下に、南北225m、東西390mの地下歩道を持つ十字型をしている。紙屋町シャレオの「シャレオ」は「おしゃれ」な街を意味しており、公募で選ばれた愛称である。

毎日のようにイベントや物販で賑わっている中央広場や東西南北の地下歩道、また北広場のサンクンガーデンはそれぞれの意図を持ったデザインがされている。

中央広場は水辺の雁木をイメージした幅広い階段や広場平面は水面をイメージした乳白色の敷石となっている。南北通りは中世ヨーロッパのムードを醸し出す石畳と各店舗が独自に作ったファサード、ゆったりとした空間を支える列柱、モノトーンの局面天井となっている。東通りはレトロを感じさせるレンガ調のタイルで統一し、西通りは砂岩による壁面となっているが、いずれの通りの壁面もデルタの堆積層をイメージさせる積層模様としている。



中央広場イベント

また、南北通りの柱は上部ほど大きくなる円柱であり、白い大理石が貼られているが、路面近くはグレーの御影石となっている。この御影石部は各柱で高さ異なっており、通りを進んでいくと、波のように高低差が変化しているのがわかる。



南通り



東通り

中央広場の周辺通路や北広場、南広場には本石モザイクの床模様が描かれており、これはシャレオのデザイン・キーワードの一つである「波紋」をイメージしている。

さらにアストラムライン県庁前駅から県庁に向かうサンクンガーデンの壁面には、地下街建設中に相生通りから出土した広島城外堀の石垣がモニュメントとして復元されている。

その他にも、南通りのスタバの前にはチタン製のアートベンチや東中広場、西通りには当時の広島市立大学芸術学部の学生によるコミュニティアートの作品が路面に埋め込まれている。

このようにシャレオは広島歴史と文化を随所に取り入れたデザインとなっており、シャレオでお買い物する際には探しながら是非見ていただきたいと思う。



北広場・石垣

〇 読者からの投稿

豪雨災害に遭って思うこと

坂町住民 河村美彦

「平成30年7月豪雨」では、西日本を中心に死者224人、行方不明者8人、住戸被害は全壊6,695棟、半壊10,719棟など甚大な被害が出ました。

私の住む安芸郡坂町でも、死者16人、行方不明1人、全・半壊家屋は1,100棟を超える被害が出て、今なお多くの方が仮設住宅での生活などを余儀なくされています。(10/9現在)

坂町では、連続雨量(7/5(木)9:00~9(月)17:00)は459mmを観測、400mmを超える雨が斜面の立木や転石なども巻き込んで谷筋を流れ下り上流部のため池を決壊させ、総頭川を一気に流れ下りました。

上・中流域では、流木や転石が川沿いの家屋を直撃、掃出し窓などから土石流が流れ込んで

流木や土砂で埋まりました。中流域にある自宅も土石流が流れ込み床上浸水し、石積み護岸が崩壊して敷地の一部が陥没しました。

土石流は、中流域で本流と建設途中の県道の二手に分かれて流下し、川沿いの金融機関や店舗、歯科医院などが、また、下流域のJR坂駅付近や坂小学校近くの低地でも、住宅やアパート、金融機関、医院などに流れ込み、店舗や金融機関、医院の一部は未だ休業したままです。



自宅上流より総頭川下流を望む

また、急傾斜地崩壊防止工事中に発見された埋蔵文化財発掘調査の終了直後、豪雨により斜面が崩壊し付近の家屋に立木や土砂が流れ込みました。

被災後、道路や川には家屋から運び出された土砂や家財・家電、畳、流された車、流木や転石・土砂などで埋め尽くされていましたが、河道の土砂とともに川下側から順次撤去され、護岸崩壊部には大型土嚢が積まれ、8月末には夜を徹した応急復旧工事がほぼ完了しました。

この豪雨災害から学んだこと、それは日頃から災害への備えをしておくこと、最新情報を掴み、周囲の状況を見極め、不安を感じたら早めの避難を心掛けること。また、住んでいる地域や土地にはどんなリスクがあるのか、事前に知っておくことが大事だとあらためて思いました。

国土交通省が調査し発表している土砂災害（土石流、地すべり、急傾斜地の崩壊）危険箇所データによると、土砂災害ワースト3は、①広島県 31,987箇所、②島根県 22,296箇所、③山口県 22,248箇所と中国地方3県が上位を占め、中でも広島県は群を抜いています。

各自治体ではハザードマップを公表していますが、あらためて「坂町土砂災害ハザードマップ」を見ると、土砂災害を警戒区域と特別警戒区域に分けて地図上に示しており、私が住む土地は、やはり土石流の土砂災害警戒区域に入っていました。

また、「坂町史 通史（考古～近代）編」を読むと、坂八幡宮境内と小屋浦公園内の2か所に水害碑が建立されており、明治40（1907）年7月15日、今回と同様な水害が起こり、死者46人、傷者56人、家屋流出54棟、倒壊69棟、田園荒廃50町余歩などの被害が出たことが記されており、先人が残してくれた記録を後世にもきちんと伝えていくべきと思いました。



坂八幡宮境内に建つ水害碑

今後、砂防ダムや河川の整備、急傾斜地崩壊防止工事などが本格化しますが、坂町本郷の一部地区（戦災を受けず結果として手つかずのまま残った地域）では、車も入れないことから若い人は出て行き空き家も目立ち、工事車両も入れず、復旧・復興の足かせともなっています。

豪雨災害からの復旧・復興のこの機会を捉え、これまで怠ってきたインフラ整備を進めることや、地域が抱えている課題にも目を向け、安全で安心な地域づくりのための施策、そこに暮らす人達の生活の質を向上させるきめ細やかなビジョンづくりと、その具体化が強く望まれます。

今回の豪雨災害では、田畑にも土石流が流れ込み大きな被害が出ましたが、遊水地として減災に寄与したことは高く評価すべきで、今回、土砂等が堆積した中流域周辺を遊水地として位置付け、川幅を広げ水辺空間として整備することで、潤いのある空間を創り出すこともできます。

復旧・復興にあたり、安全で安心な暮らしとともに、豊かな自然環境も後世に伝えていくべきではないでしょうか。総頭川には被災前までホテル、魚や蟹なども生息しており、これらの水生生物が生息していけるような水辺を設えることも大事なことだと思います。

災害に遭って思ったこと、それは、巧遅は拙速に如かずと言われますが、将来にわたり安全で安心な地域、自然豊かな地域を後世に引き継いでいけるのであれば、巧遅は拙速に勝ると言えるのではないのでしょうか。

□ 編集後記

度重なる豪雨災害から少し時間が経って、災害の内容から災害の原因や災害に対する備えや心構えといったことが語られ始めました。

また、人口減少や高齢化など都市の基本的な方向が変化して行く中、私たちはどこに住めば安全安心なのか、これまでの自然を横目に見た暮らしぶりが間違っていたのではないか、と言う指摘も数多く出てきています。

私たちのまちが無駄のない堅実なまちづくりを取り戻していくには、どうしていけば良いのでしょうか。

行政とは別に、意識のある者が様々な分野から集まって、蓄積したまちづくり課題を検討し、その総体として広島の明日の姿を組み立て上げる。そしてその経緯と結果を行政と慎重に議論することが必要な時期とされます。過去には決して戻れません。これからを考えることで都市は健全化します。

こう考える行動体の実現が待たれるところです。そろそろタイムリミットですよ。

(編集委員 前岡智之)

○お知らせ：「時代を語り建築を語る会(第23回)」開催

・語り人：平岡 敬氏 (元広島市長)

・テーマ：市長時代を語る

・開催日：2018年12月8日(土) 17:00~19:00

・会場：合人社ウエンディひと・まちプラザ 研修室C (北棟5階)
(旧広島市まちづくり市民交流プラザ)

・会費：1000円(資料費・会場費)、学生・院生は無料

・参加申込：広島諸事・地域再生研究所

電話/FAX：082-223-7226 メール：nisimar5@hotmail.com

***定員は50名程度ですので、参加希望者は早めにお申し込みください。**

・主催：時代を語り建築を語る会実行委員会(代表 石丸紀興)

***メルマガを読まれての感想や質問及びひろしまのまちづくりについて
皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください!**

(投稿は500字程度でお願いします)

編集委員

石丸紀興	広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視	心豊かな家庭環境をつくる広島21理事
瀧口信二	広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷 章	ガリバープロダクツ代表
前岡智之	中国セントラルコンサルタント代表